

# 大 学 史 研 究 通 信

第 105 号 2022 年 9 月 5 日 (月)

大学史研究会

第 105 号の内容：会員情報・新入会員自己紹介、2022 年度大学史研究セミナーについて、『大学史研究』編集委員会からのお知らせ、運営委員会からのお知らせ、総会の開催について、会員新刊ニュース、2022 年度会費納入のお願い、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

## 会員情報

### 新入会員

李 談 哲 会 員

所属：東北大学大学院文学研究科日本学専攻現代日本学専攻分野博士課程後期（学生会員）

井澤 直也 会 員

所属：元日本女子体育大学健康スポーツ学科教授

## 新入会員 自己紹介

### 李 談 哲 会 員

このたび入会させていただきました、東北大学大学院の李談哲と申します。この 3 月に、東北大学大学院文学研究科の現代日本学研究室で博士課程前期を修了し、同研究室の後期課程に進学しました。

前期課程の時から、文学研究分野に属すると思われる「検閲」が如何なる形で占領期の大学に影響を与えたことについて関心を持っており、修士論文もそれを主な内容にして完成しました。

これからは、占領期の GHQ・日本政府・教育関係者が占領期大学の諸問題を巡る衝突・妥協について、少しずつでも研究を進めていきたいと考えております。

大学史に関する見識はまだ浅いですが、皆様のご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願いたします。

### 井澤 直也 会 員

井澤直也と申します。宜しくお願致します。大学院を満期退学して 35 年になります。これまで幾つかのテーマで研究を進めてきました。直近では実業学校生の卒業経歴を追って来たのですが、これを『実業学校から見た近代日本の青年の進路』明星大学出版部から上梓しました、2011 年のことです。その中で旧制専門学校生の進路先の解明の必要性を感じ大学史研究会に入会させていただきました。特に専門学校生の帝国大学への進学の実態が分かってきましたので、調査していきます。

(会員情報担当：船勢肇)

## 2022年度大学史研究セミナーについて

今年度の大学史研究セミナーは、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み、昨年度同様オンラインにて開催いたします（対面の可能性もあり）。

### 第45回大学史研究セミナー 開催概要

- ・日時：2022年12月3日（土）13：00～18：00 シンポジウム・総会  
12月4日（日）9：00～13：00 自由研究発表（時間の変更可能性有）
- ・開催方法：Zoom形式（ミーティングID、パスワードは、参加申込をされた方にセミナー週間前を目途にメールでご連絡いたします。なお、総会については会員のみ限定し、別にミーティングID、パスワードをご連絡いたします。なお、対面の可能性もあります。）
- ・参加費：開催方法決定の上、お知らせします。
- ・申込方法：当研究会HPにて受付（後日、参加申込用URLを公開）
- ・申込期間：11月16日（水）9：00～11月22日（火）17：00
- ・お願い：シンポジウム及び自由研究発表の各種資料は、発表者本人の許可なく撮影、複製等を禁じます。

### 自由研究発表募集

- ・発表時間：お一人あたり45分（発表30分＋質疑15分）
- ・発表形態：開催当日に発表資料（Word、PowerPoint、PDF）をZoomにおいて画面共有（対面の可能性もあり）
- ・発表資格：年度会費を納入済の会員
- ・申込方法：当研究会HPにて受付（後日、発表申込用URLを公開）
- ・申込期間：10月20日（木）9：00～11月2日（水）17：00

初日シンポジウムの詳細については決まり次第、また、最終的に確定したセミナープログラムは11月中旬頃に、当研究会HPにて公開する予定です。

（セミナー担当：山本珠美）

## 『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

『大学史研究』編集委員会では現在、第31号の編集を進めています。特集は、第44回大学史研究セミナーのシンポジウム「大学と戦争」の内容を収録します。また、投稿論文は今号では6本の投稿を受理しました。現在、編集を進めています。12月の発刊を目指して作業中ですので、楽しみにお待ち下さい。

今号では、前30号の内容がかなり大部に渡ったこともあり、書評や史料・文献紹介は掲載しないこととなりました。書評と史料・文献紹介は、編集委員会からの依頼によるだけでなく、会員からの応募も受け付けています。会員からの応募は投稿論文と同様に受け付けていますので、次号ではぜひ会員の皆様からのご提案をお待ちしています。

次の原稿募集は、第32号に向けてとなります。正式な日程は改めてお知らせしますが、例年、3月末が執筆エントリーの期限、6月末が原稿の期限となっています。論文、研究ノート、書評、史料・文献紹介の原稿をお待ちしていますので、ぜひ奮って投稿して下さい。

（紀要編集委員長：福留東土）

## 運営委員会からのお知らせ

運営委員会代表の「挨拶」でも書いたことであったが、今を去ること大昔に研究会事務局の代表をお引き受けした筆者にとっては、現在の大学史研究会の運営組織（運営委員会、事務局、さらには編集委員会というトロイカ体制）は、家内工業が株式会社になったくらいの違いがあり、今もなお、ワンダーランドの中を彷徨っているというのが、正直な感想である。以下、前年度の総会以降、運営委員会の活動のあらましを、他の委員の方々の報告と重複しない範囲で述べたあと、筆者が現在、考えていることを若干、付け加えたい。

2022年3月25日午後1時より、ZOOMシステムによって、運営委員会が開催された。福留紀要編集委員長からあらかじめ提起されていた、「『大学史研究』のいっそうの普及と流通のための提案」を中心に、おおむね、以下の諸点にわたって議論が行われた。

- (1) 『大学史研究』をJ-STAGEへ掲載すること、すなわち、Webベースでの全文アクセスを可能にすること。福留編集委員長より、他学会の紀要について同様の手続きをおこなったという説得的な経験談にもとづいて、必要な作業（特にJSTへの申請と東信堂との交渉）と、おおよそのスケジュールについて説明があった。
- (2) 『大学史研究』バックナンバーの普及について。東信堂から発行されるようになった第23号以前については特定の少数号を除いて、大量の在庫となっている（これらは、前運営委員であった岡田大士会員の研究室に保管していただいている）。第23号以降についても、東信堂より販売促進への協力が求められている。いずれも、早急に対策が必要である。具体案としては、①運営委員会、事務局、編集委員会のそれぞれの委員が、勤務先の大学・学科の図書館・資料室に、積極的に購入を働きかけること、②機関会員になっている個別大学の史料室（大学アーカイブズ）に、バックナンバーの購入を勧める。同時に、より多くの史料室に研究会への入会を勧める。このためには、全国大学史資料協議会といった、個別大学史料室の連合体の年次大会等の機会を利用したらどうか。

『大学史研究』は、歴代の編集委員会のご尽力により、また、東信堂から広く一般に市販されるようになったこともあり、格段に充実してきたと言えよう（ちなみに、各号には、通常のISSNに加えてISBNが付されているので、通常の図書として図書館等に購入希望を出すことができる。筆者もこの手段で入れてもらった）。ただ、これから先のことを考えると、二つの大きな懸案を抱えていると筆者は考えている。

ひとつは、『大学史研究』は、過去に蓄積された余剰金で発行しているわけであり、したがって研究会の各年度の収支は均衡していない（基本的には会費に依存する収入をはるかに上回る刊行費を支出している）ため、このままでは近い将来に、予算的に破綻してしまうことである。余剰金を最も有効活用していることはよいとして、通常の年間予算とは切り離して処理すべきではないか。それと同時に（上記のことを繰り返すことになるが）、会員数の飛躍的増大のための戦略を考えるべきではないか。

次に、『大学史研究』は編集にあたって、厳格なレフェリー制度を採用しているわけであり、内外の歴史専門ジャーナルに比しても、掲載された論考の質は、ひけを取るものではないと筆者は考えている。ただ、近年になって、若手研究者の採用や昇進という機会において、その研究業績について、査読の有無だけでなく、日本学術会議協力学術研究団体が発行するジャーナルかどうか問われる場面が確実に多くなったと筆者は考えている。大学史研究会が協力学術研究団体になるという可能性については、筆者が研究会事務局の代表をお引き受けしていた時代にも、ある会員より示唆されたことがあった。ただし、大学史研究会の「学会化」と引き換えによってであるならば、それは止めるべきであるという意見が大勢であった。筆者自身、過去においても現在においても同じ意見である。また、研究会の現会則制定にあたって、その骨子として、「学会化ではなく研究会としての会則を制定する」という一項目が入っていたわけである（「大学史研究通信」第98号、2019年10月4日参照）。「学

会化」することなく、すなわち、現在の体制をいささかも変えることなく、日本学術会議協力学術研究団体として認証される途はないのか。模索してみる価値はあるのではないかと思う次第である。

(運営委員長：坂本辰朗)

### 総会の開催について

今年度の総会では、過去の総会において何度かご意見を頂いてきました「大学史研究通信」のメール配信及びオンライン化への移行について、審議をしたいと考えております。研究会からの情報発信のツールとして100号を超える通信が刊行されてきました。研究会の過去・現在・未来の在りようを記録し保存する上で大切な媒体です。通信を確実にお届けできるように、切り替えの時期、会員みなさまのネット環境等へ配慮しながら進めていく予定です。詳細につきましては総会においてご提案させていただきます。

(事務局長：山本尚史)

### 会員新刊ニュース

- ・羽田貴史・松田浩・宮田由紀夫編『学問の自由の国際比較—歴史・制度・課題』岩波書店、2022年3月

### 2022年度会費納入のお願い

今年度の年会費納入についてお願いのご連絡を申し上げます。大学史研究会の実収入は、会員各位からの年会費に大きく依っております。会員の皆様の円滑な研究会運営へのご協力に感謝を申し上げます。引き続き、大学史研究会の発展と円滑な運営のため、会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。年会費の納入の詳細につきましては、同封の納入依頼通知をご覧ください。

年会費は5,000円です。なお、大学院等在学学生各位には、「院生・学生会費」として3,000円が適用されております。また、過年度分年会費未納の会員には、未納年度と本年度会費分を含めた金額総計を通知しております。年会費を3ヶ年度分以上滞納されている会員には、研究会の継続参加のご意志を年会費納入によって確認できるまでは、大学史研究会からの諸連絡、「大学史研究通信」、『大学史研究』（紀要）等の発送の停止が決定しております。該当する会員へのご連絡通知には、これにする事項が記載されておりますのでご留意願います。なお、本依頼通知発送と入れ違いに年会費を納入いただきました場合には、何卒ご容赦のほどお願い申し上げます。

#### —— 年会費納入払込先 ——

郵便振替口座： 大学史研究会 口座番号 00120-3-47583

または

銀行口座： 大学史研究会 三井住友銀行 池袋東口支店（店番671）  
普通預金（口座番号3456109）

(会計担当：山崎慎一)

## 編集後記

今夏もコロナ禍が続き、会員の皆様につきましては落ち着かない日々をお過ごしのこととお察し致します。ポスト COVID-19 時代に向けて会員の皆様が安心して教育・研究活動を行えますよう、引き続き、この「大学史研究通信」で少しでもお役に立てる内容を盛り込んで作成・編集を積極的に進めて参ります。どうぞよろしくお願ひ致します。

(通信担当：蝶慎一)

「大学史研究通信」第 105 号の編集は、事務局・蝶 慎一が担当いたしました。

連絡先：jshshe@daigakushi.jp

「大学史研究通信」第 106 号は、2022 年 11 月発行予定です。

### 大学史研究会

#### <運営委員長>

坂本辰朗

#### <事務局連絡先>

事務局へのお問い合わせは、下記代表 E メールアドレスまでお願ひ致します

E-mail: jshshe@daigakushi.jp

#### 運営委員 (五十音順)

坂本辰朗 (創価大学)	福石賢一 (高知工科大学)
福留東土 (東京大学)	船勢 肇 (長崎女子短期大学)
山崎慎一 (桜美林大学)	山本珠美 (青山学院大学)
山本尚史 (筑紫女学園大学)	

#### 事務局員 (五十音順)

蝶 慎一 (香川大学)	原 圭寛 (湘南工科大学)
-------------	---------------